パラパラ

脳好き人間

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
パラパラ

【Ｎコード】
Ｎ６４８２Ｙ

【作者名】
脳好き人間

【あらすじ】
人類がみんな狂人になっちゃったよ。あーあ。

完全に趣味全開で書きます。肉体的にも精神的にも残酷な描写があるかもしれません。ごめんなさい。

俺は、普通だ（前書き）

人間皆狂ってくれれば、受験勉強しなくて済むのに。

俺は、普通だ

簡単に説明すると、人類がみんな狂った。何かの研究をやってたような気がする俺の予測では、多分太陽からの磁気みたいなのが原因だったと思う。

幸い俺だけは狂っておらず、今朝は普通にコンビニで朝飯を買おうとしていたのだが、やっぱり店員が狂ってたから一悶着あった。

普通に飯を買おうとしただけなのに、俺を万引き犯扱いして、殴り掛かってきやがった。まあ、木刀で返り討ちにしてやったが。

全く、人間が他の動物達より優れているのは、脳のおかげだというのに、その脳が壊れているなんて、可哀相に。しかしあれだな、俺は木刀であいつを殴ったが、あいつの脳は壊れてるんだから、傷害罪にはならないだろう。脳の壊れた人間など、ただのタンパク質の塊だ。もしかしたら器物破損罪にはなるかもしれないが。

とにかく、早く家に帰ろう。そろそろ俺の脳コレクションの手入れをする時間だ。ああ、こんな欠陥製品ばかり見ていると目が腐りそうだ。早く脳を見て口直し、いや目直ししないと。

しかしまあ、本当に助かった。人間の脳が汚れる前に、脳コレクションを集めておいて。あと少し遅かったら永遠に完成製品を見ることが出来なくなるところだった。

しかしかしかしかしまあ、早過ぎてもやばかったんだが。警察に捕まってしまってたかもしれないし。

ふはひひ、全く、丁度良いタイミングで異常が起こってくれたもんだ。おかげで刑務所行きにならずにすんだ。

とにかく、この異常者の楽園、『パラノイア・パラダイス』での生活を楽しむとしよう。脳と共に。

いや、待てよ、パラノイア、つまり偏執病は、異常者のことではなく、異常に偏った思考を持つ者のことだったような。

つまりこの名称は正確でない。いやしかし、俺はどうしても『パ

ラパラ』という略称で呼びたいんだ。
だからそう、つまり、細かいことは、気にしない、だ。

復讐したい年頃なんです

許せない許せない許せない許せない許せない許せない許せない許せない許せない許せない。あの木刀を持ち歩いている狂った男が、私の可愛い妹を殺したんだ。私は見たんだ、あいつが笑いながら妹の頭を鋸で開けているところを。

すぐに警察に電話して、両親にも伝えようとしたけど、丁度その時に異変が起こってみんなおかしくなってしまった。

母は私の話しを聞くと、「あらまあ、あの子もそういう年頃なのね、あんたは妹に構いすぎなのよ。しばらくあの子の自由にしてあげたら」とか言い出すし、犯人に復讐したいと父に伝えると、「ふん、お前もそんな年頃か。いいぞ、責任は父さんがとってやる。存分に暴れてこい。ははははは」とか言われた。

仕方が無いから愛犬のポチに相談したんだけど、「わんっ、わん、わんわん」とか言われたし、やっぱ家族は当てにならないな、と思った。

これはもう自分でやるしかないな、と思い、おじいちゃんちに行って刀をもらってきた。流石にあの男も、刀で斬られれば死ぬだろう。おじいちゃんと同じように。

とにかくあいつは毎朝コンビニに朝食を買いに行ってるようだし、コンビニのまえの電柱で張り込むぞっ！あんパンと牛乳を買ったし、完璧だ！

そして朝、あいつがいつも通りコンビニに来た。いつも通り食べ物を手にとり、大分前にあいつが殺した店員の死体を木刀で殴ったあとに店から出た。

今がチャンスだ。後ろからザックリ斬ってやる。シミュレーションは沢山したし、ミスは絶対にしない。

よし、レッツ人斬り！

「天誅ーだーってうわっ！」

あいつまであと一歩ってところで、こけてしまった。足元を見ると、バナナの皮がおいてある。ま、まさか、そ、そんな、馬鹿な！

「おい、君、大丈夫かい？」

憎きあいつが、手を差し延べてきた。くそっ、私の妹を殺した分際で私に話しかけるとは許せない。

「お前っ、よくも私の妹を殺したなっ！斬り殺してやる！」

「はあ、俺が君の妹を殺した、だと？」

ふん、戸惑ってるな。自分が殺した人の家族にビビってるな。それか、この刀にビビってるのかな？

しばらくすると、男は木刀と私の顔を交互に眺め始めた。しまった、この状態じゃ、逆に殺されるかもっ。想定外だよ！

「……壊すには惜しい」

「はっ？」

何か呟いていたようだけど、慌てていたせいでよく聞こえなかった。なんて言ったんだろう？

「みんな狂ってしまってるから、一応確認のために聞くけど、君は本当に妹がいたのか？」

「いたに決まってるじゃない！何意味わからないこと言ってんの！」

今度はハッタリか、なんて柔軟性にとんだ嫌がらせだ。

「なら聞くけど、君の妹の名前は？歳は？容姿は？思い出せるのか？」

「そんなの当たり前、じゃ、な、い？」

あれ、思い出せない。というか、私に妹なんていたのか？いたとしたら、思い出せないのはおかしい、よね？

「ふん、やはりそうか。君もまた、他の人と同じく狂ってたんだ」

「そ、そんな。私、狂って」

「ショックか、まあ、そうだろうな。でも、いいじゃないか」

「な、どうして？」

「君は今は正気を取り戻しただろ。狂ったの、心は正常に戻せるんだよ」

「そう、か。……あ、あの、ごめんなさい。さっきは勝手に思い込みで酷いこと言っちゃって」

思い出したら恥ずかしくなってきた。私はなんてことをしようとしていたのだろう。

「いや、いいんだよ。おかげで、君みたいな綺麗な人に出会えたんだから」

「えっ！綺麗って、私のことですか？」

な、なんなんだこの人は、初対面でいきなり綺麗とか言ってくるなんて。

「ここに他の人はいないだろ。っておい！足怪我してるじゃないか！大丈夫か？」

言われて足を見てみると、私の足に刀が刺さってた。多分、さっきこけたときに刺さったんだろう。

「大丈夫じゃ、ないです」

「そうか、救急車は当てにならないしな。そうだ、俺の家に医療道具があるんだが、どうする。家に来るんなら、治療してやるぞ。一応医者なんでな」

普通なら初対面の男の人の家に行くなんて言語道断だけど、今は緊急事態だし、この人は私のこと綺麗とか言ってくれたし、行ってもいいよね。

私は男の人の提案に、小さく頷いた。

私は歩けないから、背負ってもらうことになった。かなり恥ずかしかったけど、不思議と幸せな気分になった。この人なら私を、そしてみんなを助けてくれそうな、そんな気がしたから。

「ふう。やっと運びきったか。しかし姉妹揃って騙されやすい性格だな。まあ、おかげで新鮮な脳を手に入れれたんだから、俺としてはラッキーだが。それにしても綺麗だな、こいつの脳」

復讐したい年頃なんです（後書き）

書き終わって読み返してみると、自分の思考回路にドン引きしました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6482y/

パラパラ

2011年11月20日14時01分発行